

# 第8回平和市長会議総会

## 市民団体・被爆者団体との対話集会

―核兵器廃絶に向け、私たちは何をすべきか―

2013年8月4日(日) 16:30~18:00

広島国際会議場ヒマワリ

コーディネーター 水本和実(広島市立大学平和研究所副所長)  
取組内容発表 坪井 直(日本原水爆被害者団体協議会代表委員)  
大越和郎(広島県原爆被害者団体協議会事務局長)  
岡村信秀(広島県生活協同組合連合会会長理事)  
民谷 唯、稲住衣美、村上典子(広島女学院高等学校)

参加都市等による発言

リチャード・ミロッコ(「That Day」Film 共同監督・プロデューサー)

**司会：**

皆様、お待たせをいたしました。ただ今から市民団体・被爆者団体との対話集会を開会いたします。

この対話集会のコーディネーターは、広島市立大学広島平和研究所副所長の水本和実教授にお願いいたします。

水本教授は、朝日新聞社ロサンゼルス支局長などを経て、1998年に広島市立大学広島平和研究所に赴任され、2010年から同研究所副所長を務めておられます。

それでは、水本教授、よろしくお願いいたします。

**コーディネーター：（水本和実 広島市立大学広島平和研究所副所長）**

ご紹介ありがとうございます。

皆さん、こんにちは。この対話集会のコーディネーターを務めます広島平和研究所の水本と申します。よろしくお願いいたします。

今日の対話集会のテーマは、「核兵器廃絶に向け、私たちは何をすべきか」です。今日の対話集会に広島を代表して三つのグループの人たちに来ていただいております。

最初のグループの人たちは、被爆者を代表している方たちです。それぞれご紹介したいと思います。

まず最初に、その被爆者を代表して、日本原水爆被害者団体協議会の坪井直代表委員に来ていただいております。

坪井先生、どうぞ。

続きまして、もうお一方、被爆者を代表して、広島県原爆被害者団体協議会の大越和郎事務局長に来ていただいております。

大越さん、よろしくお願いいたします。

二つ目のグループといたしまして、広島にはいわゆる生活者、一般市民が大勢暮らしています。オーディナリーピープルですが、そういう人たちは平和のことも考えていますが、安全な食物、安全な生活といった日々の生活の中での平和を求めています。そういう一般の生活者を代表しまして、広島県生活協同組合連合会、岡村信秀会長理事に来ていただいております。

よろしくお願いいたします。

続きまして、もう一つのグループは、広島の若者、ユースを代表しまして、広島女学院高等学校3年の民谷唯さん、2年生の稲住衣美さん、村上典子さんに来ていただいております。

どうぞ。よろしくお願いいたします。

三つのグループの方たちに来ていただいておりますけれども、まず最初に、被爆者を代

表しまして、坪井先生からご発言をお願いしたいと思っておりますけれども、坪井先生はもともと教育者でもいらっしゃるし、もちろん被爆者を代表していろいろな活動に取り組んでこられました。今でも、広島コミュニティーにとってはある意味で教師といえますか、私たちにとっても先生のような方でいらっしゃいます。特に精神的な意味でも被爆者のスピリチュアルリーダーといえますか、そういうお立場でもありますので、まず最初に、坪井先生からそうしたお話をいただけるものと期待しております次第です。

坪井先生、よろしく願いいたします。

まず、発言を先生のほうからお願いいたします。

**坪井 直（日本原水爆被害者団体協議会代表委員）：**

私は、坪井直という名前であります。今、年は88歳です。被爆者であります。九死に一生を得た、そういう波乱万丈な生き方をしております。私の自己紹介を初めに行わせていただきました。

それでは、私の被爆体験をまずお話しします。その前に、現在の状況を先にお話しさせてもらいます。原爆を受けてから、今どうなっているかということについて先に話をさせていただきます。

今、私は二つのがんを持っております。一つはやや成功しております。もう一つのがんは、目下まだ追跡検査をずっとやっているものです。それが二つあります。

それから、心臓病をやっております。いわゆる舌下錠というニトロの麻薬をお医者からもらって、常に今でもこのポケットの中に入れておるわけです。休むとき、睡眠をとるときには、枕もとにもその薬を置いているわけです。その薬は、お水で飲んではいけません。舌下錠と言いまして、この唇の中へ入れるわけです。心臓が止まりかけると、それのお世話にならなければいけないのです。私は事務所でも家の中でもそういうことが起こりますし、外国に行く、アメリカに行く飛行機の中で、あるいはヨーロッパに行く飛行機の中でも、それを飲むことがあるわけです。そういう心臓病を今持っています。

三つ目に、私は今、再生不良性貧血症といまして、血をつくる造血機能が放射線によって5か所破壊されています。従って、皆さんと同じように、100%食べたものが血となり肉となりエネルギーになることはないのです。皆さんが100%であれば、私は70%しか血がつかれないんです。だから、しょっちゅう、いくら検査をしても貧血が治ったということはありません。造血機能を破壊されておるからです。それが三つ目の大きな問題であります。そういう病気をしており、原爆症といわれる認定も受けているわけです。

さて、ちょっと前置きが長くなりましたが、そういう体であります、今ね。従って、6種類の造血のための薬とか、栄養剤とか、あるいは心臓のほうの薬も飲まないといけません。6種類、朝、昼、晩と飲んでるんですよ。しかも、2週間に1回は点滴といいまし

て、ぽとぽとぽとぽと 1 時間かけて点滴注射をしなければならぬんですよ。そうしなければ生きていかれないんです、私は。それが一般的な被爆者です。

さて、そういう被爆者ですが、私は今から 68 年前の原爆投下のときに、年が 20 歳でありました。従って、68 年ですから、今は 88 歳です。20 歳のときに、爆心地から約 1 キロメートルの地点で原爆に遭いました。従って、私たちがおった範囲では、60%の人がその時に亡くなったわけです。

私は大学へ行く道路上で原爆を受けるわけです。吹き飛ばされます。気絶します。気がついたときには、真っ暗、100 メートル先が見えません。しかも、その時の私の状態は、頭から手、背中、足までやけどをしております。しかも、着ていた衣服はここから焼けて飛んでいる、こちらも飛んでいます。ズボンも半分は 2 本とも飛んで半ズボンに、そういう状況でありました。しかも、10 メートルぐらい吹き飛ばされましたので、全部血だらけです。それに黒焦げになった手足、そんな状況で、私は逃げていくわけですがけれども、もう 30 分したら上は裸ですよ。それは背中に火がついていたわけですから。そういうような状況で、もう下は半ズボンで、火のないところを探しては逃げていったわけですね。そういうことがありました。

それから、その当時、我々と一緒に行動していた同級生とか、あるいは下級生で、その日に亡くなった人が半分以上おります。私は運よく生きたほうです。それから、私は治療も何もなしで、さまよい歩きながら、野宿とかいうんですけれども、そういうような生活をするようになりました。

やがて、臨時の仮治療所ができて、そこへ行きましたが、「もうだめです」と言われたわけです。もう私は歩くことも何もできなくなっていました。担架で運ばれたんですが、そういうことがあって、私はもう何にも分からなくなりました。それで、8 月 15 日に戦争は終わるわけです。日本の戦争は終わるわけです。それを知りません。だから、1 週間ぐらいは野宿をしながら頑張って生きていたんですが、分からなくなりました。それから、9 月 25 日までの 40 日間、何を食べていたのか、そういうことは分かりません。記憶にないんです。

そういう、いつも死の世界を彷徨ってきた私が、今ここで話ができるのは、多くの人に助けてもらったからです。そのご恩返しに、私たちのような被爆者をつくってはいけないというわけで、被爆者運動に私は今精を出しているわけです。

88 歳で、毎日、事務所に出ています。そして、外国へも、ヨーロッパはもちろん、アフリカからインド、パキスタン、ベトナム、中国、韓国、北朝鮮、アメリカへは 8 回も行って、やっております。どうしても核兵器はなくさなければいけません。それは普通の空襲や爆弾で被害を受けたのと違って、生涯続くんですよ、被害が。それが放射線の恐ろしいところですよ。

だから、こういう原子爆弾、核兵器については、私たちはどんな理由があっても、地球上には要らないものである、絶対悪である、だから無くさなければならないということを、世界の各地に行って、あるいは日本の国内で話をしております。

最後に、私が生き残ったのは、母親の一声で生きたんですよ。私はもう何にも分からなかったのです。その時に母親を見つけました。大きな声で私の名を呼んで、その時に私は、「ここにおるよ」と言って手を挙げました。それで、退院ができて助かるわけです。母親の一声がなかったら、ここで話をすることはありませんでした。

皆さんとともに、人の命は大事ですから、原爆でも何でも、とにかくテロであろうと何であろうと私は反対しますよ。1対1の個人的な殺人でもいけない、戦争もいけません。命のとり合いではありませんか。絶対に許せません。必ず、良識ある、英知ある人類の知恵で、話し合いで事を解決しなければいけないというように思っております。

ご清聴ありがとうございました。

**コーディネーター（水本和実 広島市立大学広島平和研究所副所長）：**

坪井先生、ありがとうございました。

私のほうから、二つだけ皆さんに申し上げておきたいと思います。坪井先生もつらい体験を今お話しいただいたんですけれども、放射線が様々な症状を引き起こしますけれども、すべての原因は遺伝子に放射線が傷をつけるということに由来します。だから、あらわれ方は違っていても、すべていろいろな臓器に、ポイントは遺伝子に放射線が傷つけたことによって、すべての症状が起きているということが分かっております。それをぜひ、広島に来られた皆さん、理解していただきたいなと思います。

それと、もう一つは、坪井先生には苦難の物語の一端を今お話しいただきましたけれども、まだまだ本当に苦しい体験をした方が一言も家族にすら話していない人が大勢いらっしゃって、深い、深い心の傷を負った人が広島にもいらっしゃいます。そういうこともぜひ記憶にとどめていただければと思います。

続きまして、被爆者を代表しまして、広島県原爆被害者団体協議会の大越事務局長にお願いをいたします。よろしくお願いいたします。

**大越和郎（広島県原爆被害者団体協議会事務局長）：**

大越と申します。

5歳のときに被爆をいたしました。以下、私たちの会が核兵器をなくすために進めている三つの努力の方向について、報告いたします。

一つは、原爆被害の実相の普及と体験の継承の問題、そして、核兵器廃絶のための努力、そして、被爆者援護と放射線被害の隠蔽と過小評価との戦い、これらについて報告したい

と思います。

まず、原爆被害の実相の普及と体験の継承です。今、国際的に核兵器の非人道性がクローズアップされています。今年のアムステルダムでの国際会議で、「核兵器の問題を政治論にのみ論議してきたことは驚くべきことである。非人道的側面こそ、注目しなければならない」という発言がありました。4月のNPT再検討会議準備委員会では、「核兵器の人的影響に関する共同声明」が発表され、80カ国が賛同しました。

核兵器の非人道性を身をもって体験したのが被爆者です。それを伝える使命は、今、大きくなっています。高齢化の進行により、被爆体験を語れる人は少なくなっています。しかし、体験と運動の継承者である被爆二、三世など心ある人々によって、今、広島を訪れる人に、また、依頼を受けて全国各地で被爆の実相を語り、また海外にも出かけ、いかに核兵器使用が人道に背く残虐な行為であるかを訴えています。同時に、原爆投下を招いた戦争についても語り、核兵器も戦争もない世界を訴えています。

話を聞いてくれる人の年齢などは様々です。限られた時間の中で正確な事実と私たちの思いを伝えるのは容易ではありません。会としては、定期的に研修を行い、討論を通して、分かりやすく心に響く内容にするための努力を続けています。これまで話した人は年間約4万人近くになります。それなりに被爆の実相、そして、体験の継承を進める上での役割を果たしていると自負しています。今後もこの努力を続けていきたいと思っています。

次に、核兵器廃絶の問題です。「再び被爆者をつくらない」の誓いのもと、核兵器のない世界実現のため努力を続けています。世界の「核兵器なくせ」の世論と運動は、幾度かの核兵器使用の危機を脱する大きな力になりました。この運動の成果で、長崎以後、人類の頭上に核兵器が投下されることはありませんでした。

しかし、今も多くの核兵器が存在しています。被爆者をはじめとする全世界の核兵器廃絶を求める世論は、核兵器の保有を条約で容認されている核保有国に、今迫っています。

2010年の再検討会議の「核兵器のない世界の平和と安全を達成する」という合意を受け、日本原水協が提唱した核兵器禁止条約の締結を求める署名が進められ、今、300万に迫っています。平和市長会議も、同じ目標の核兵器禁止条約の締結を要求する運動と署名を進めています。

核兵器廃絶にとって最大の障害は、核兵器による防御、核兵器保有が安全保障になるという核抑止論です。これを克服し打ち破ることが大切です。NPT再検討会議準備委員会に提出された核兵器の人的影響に関する共同声明は、「核兵器が二度と再びいかなる状況においても使用されないことに、人類の生存がかかっています」としました。日本政府はこの「いかなる状況でも」の部分に反対し、署名を拒否しました。これに対して、地元の中国新聞は、「『被爆国』名乗る資格がない」という社説で厳しく批判をしました。日本が米国の核の傘に頼り、自国の安全保障を追求している政策との矛盾を露呈しました。核抑止

論に依拠する核保有国と、核の傘の下にあるいわゆる「核傘下国」へ、核兵器の非人道性を訴え、核兵器の廃絶を迫っていくことが重要になっています。

国連事務総長は、2010年8月6日、広島から全世界に、「被爆者の生きているうちに核兵器をなくそう」と訴えました。同時に、市民運動の果たしている役割の重要性にも言及をいたしました。私たちは国連事務総長の激励を力に、今後も核兵器廃絶の努力を続けていきたいと思えます。

最後に、被爆者援護の問題です。米国は、占領下の7年、原爆被害について語ることを禁止しました。この間、被爆者は差別と偏見に苦しめられました。被爆者は原水爆禁止運動と世論の高揚に励まされ、組織をつくり、運動を始めました。被爆後12年目に、現在の被爆者援護法の基となる法律がつくられました。

被爆者援護法は、戦争被害への補償を拒否しながら、放射線被害を他の被害と異なる特殊な被害として援護するとしました。しかし、この法律の施行過程で、放射線被害を初期放射線に限定し、残留放射線や放射性降下物の影響を無視し、隠蔽と過小評価を続けました。この誤りを正したのが、原爆症認定訴訟です。

認定訴訟の判決は、原告、学者、研究者の証言を採用し、これまでの政府の施策の誤りを指摘しました。残留放射能や放射性降下物の影響を認め、内部被曝のメカニズムと影響を明らかにしました。政府は是正を迫られ、基準の見直しを行いました。

そして、2009年、被爆者代表と確認書を交わし、同時に、当時の官房長官が長年、被爆者を苦しめたことに対する陳謝の談話を発表しました。しかし、4年たっても政府はこの約束を履行していません。そのため、被爆者認定を求めて100名近くが新たに提訴し、戦わざるを得ない事態になっています。既に、二つの地裁で原告の勝利判決がされています。

広島市では、黒い雨指定地域拡大を要望しました。それを受けた検討会は、黒い雨地域では放射性降下物はなかった、影響は被曝への不安と心配によるものである、雨が降ったという証言の信用性は低いと、広島市などの要望を拒否しました。そして、審議の過程では、現行法の「大雨地域」を被害地域に指定したのは誤りの発言まで出されています。

放射線被害の過小評価は、原発事故の放射線被曝を直ちに健康への影響はないと、発表したことにあらわれています。福島原発事故では、広島の168倍のセシウムが放出し、拡散したと言われています。既に、子どもの原因不明の下痢などが発表されています。そして、いまだに15万人が避難生活を余儀なくされています。いつ故郷に帰れるか、将来の暮らしと健康は、そして不安と苦しみが続きます。原爆被害と同じ放射線被害の隠蔽と過小評価を許さぬことが、原発事故被害者への援護と補償のためにも大切になっています。

何よりも、放射線被害に対する正しい知識を国民的規模として広げ、歴史を繰り返してはならない、そのためすべての被爆者の協力と連帯が不可欠だと思います。

以上、三つの点について、私たちの会の努力の方向について報告をさせていただきました。どうもありがとうございました。

以上です。

**コーディネーター（水本和実 広島市立大学広島平和研究所副所長）：**

ありがとうございました。

大越事務局長からは、目標としてやはり核兵器の廃絶を求めると、それから核兵器禁止条約を人道上に基づいて訴えるという目標の重要性を指摘されました。

それから、放射線の被害に関しても、その後の科学者の研究によって新たに発見されたことが様々あり、絶えず放射線の危険についてアップデートして訴えていくという必要性を提起されたものと思います。

とりわけ、黒い雨の指定地域についても、研究が進めば、新たなファインディングが出るものと思われま。

以上、お二方は被爆者の代表として報告をいただきました。

続いて、普通の生活者の視点から、広島県生活協同組合連合会の岡村会長理事にご報告をお願いしたいと思います。

よろしく願いいたします。

**岡村信秀（広島県生活協同組合連合会会長理事）：**

私は先ほど紹介いただきました広島県生活協同組合連合会の会長の岡村と申します。

今日は、最初に概要説明をいたします。その後、パワーポイントを使いたいというふう

に思っております。

私どもの連合会は、現在、購買、医療、共済の領域で活動する14の生協で構成されております。会員数は約95万人ですけれども、複数の生協に加盟しているということもありますので、県内の総世帯の約3分の1が生協の会員であるというふう

に思っていただければ結構です。上部団体の日本生活協同組合連合会は、1951年3月に創立いたしました。第二次世界大戦の苦い教訓を生かし、「平和宣言」を行いました。そして、共同の力で支え合う共生社会を目指し、今日に至っております。以来、「平和とよりよき生活のために」が私たちのスローガンになっております。

この「平和」が先に来ておりますけれども、当時、先達に聞いたところによりますと、生活が先か、平和が先かという議論になったようですけれども、平和なくしては暮らしがないということで、平和が先に来たということ聞いております。

広島県内での平和活動は、被爆地ヒロシマとして被爆の実相の継承、それから核兵器廃



絶のための署名、平和行進など様々な活動を展開しております。また、他の市民団体との連携も大切にしております。とりわけ平和行進は、1979年から毎年取り組んでいます。今年は34年目を迎え、今日の午前中やってきました。隣に座っていらっしゃる被爆者団体の皆さん、それから、女性団体の皆さん、青年団体の皆さん、YMCA、そして生協、これらの団体が一緒になって沿道の市民の皆さんに平和の大切さを訴えております。

核兵器は、その非人道性から、人類と共存できない絶対悪です。にもかかわらず、地球上には今なお約1万9,000発の核弾頭が存在しております。絶対悪に未来を託するのではなく、戦争も核兵器もない平和な世界を実現し、次世代へ継承することが今を生きる私たちの責任ではないでしょうか。

被爆者の皆さんは、放射線障害に苦しみ、不安な毎日を送っておられます。しかし、常に私たちに言っていることは、自分たちのこの地獄のような苦しみを、他の誰にも味あわせたくないということです。私たちは、その強い意志と優しさにいつも励まされております。

さて、平和市長会議は本総会において、平和首長会議に名称を改めると聞いておりますけれども、全国の生協は大歓迎です。また、全国の生協は、平和市長会議が提唱している2020ビジョンに賛同し、自分たちが住んでいる未加盟の自治体で平和市長会議への加入を呼びかけています。また、核兵器禁止条約の締結を求める署名も全国で展開をしております。

全国では、平和文化センターの皆さんにもご協力いただきながら、学習会を開催するところも増えてきております。今日、その関係者も何人か参加をしておられます。今後に向けては、平和市長会議加盟自治体と市民が一体となって、戦争も核兵器もない平和な世界を目指し、市民社会のエネルギーを高揚させることが大切だというふうに思っております。

広島では、3年前から加盟自治体と市民との連携した取組を行っております。そして、今、全国に広がりつつあります。この会場の入口のところで、今年の5月に発表したアピール文が配布されております。どうぞお持ち帰りください。

以上、概要を説明いたしましたけれども、この後、パワーポイントを使って説明をいたします。

私たちは、この間、「継承と創造」というテーマで平和活動に取り組んできております。地球上で二度と核兵器が使われることがないように、被爆の惨状を聴くことを大切な活動にしております。折に触れ、被爆体験を聴く機会を設けております。

それから、子どもたちへの継承ですけれども、今年初めて取り組んだことがあります。それは、広島市にたくさんの碑がありますけれども、これまでは大人が子どもたちにガイドをしておりました。しかし、今度は子どもたちが子どもたちにガイドをするということで、現在、碑の学習をして来ています。今日、ちょうど5時から、もう既に始まっており

ますけれども、子どもたちが学んだことを子どもたちにガイドするという活動を展開しています。今年は、小学校3年から中学校1年までの8人が、人数は少ないんですけども、一生懸命学習して子どもたちに訴えているということです。

次に、署名です。核兵器禁止条約の早期締結を求める署名も、県内各地で展開していますが、これは平和市長会議が提唱している核兵器禁止条約の早期締結に賛同しているということです。先ほど言いましたけれども、全国の生協がこの署名に取り組んでいるということです。それから、県内では2011年に取り組みましたけれども、14万1,000筆ほど集めまして、今日おいでですけれども、松井市長に手渡したわけです。

それから、先ほど少し触れましたけれども、私どもは、平和市長会議加盟自治体と我々のようなNGOと連携した取組がとても重要だというふうに考えております。それを全国に呼びかけたのがちょうど2010年です。当時、広島平和文化センターの常務理事であった国本さんにもおいでいただきました。そして、左のほうは山口県生協の理事さんですけれども、私どもより1年前にこの取組を開始されました。当時のお二方にも話をいただきました。

それから、「ピースアクション in ヒロシマ」を現在、全国の生協が広島に参集して取り組んでおります。ちょうど、今日から、明日、明後日、グリーンアリーナを中心に活動を展開しています。左上が坪井理事長の被爆証言ですけれども、これは昨年行った中身ですね。

それから、次に、「ピースアクション in ヒロシマ」は「虹のひろば」、あるいは、その前後に分科会というものを設けております。左のほうは、真っ黒なお弁当ですね。それから右上が、アニメと被爆の証言。それから、右下が、サダコと折り鶴の話。たくさんの証言や活動報告を展開しております。全体で17の企画を実施しております。

それから、フィールドワークも展開をしております。昨年度、左のほうですけれども、「川から見る被爆の実相」を初めて行いました。遊覧船に乗って、被爆の実相を被爆者の方に語っていただきました。この間、「生協ひろしま碑めぐりガイドの会」の案内による平和公園周辺のガイドが中心でありましたけれども、この遊覧船に乗ってというのは初めてでございました。

それから次に、ネットワークの関係ですけれども、私たち生活協同組合以外にも、たくさんの方と連携しているわけですけれども、冒頭に言いました市民平和行進は六つの市民団体と、そのうち二つは被爆者団体の方ですけれども、連携をして、30年前から取り組んでおります。その風景がこの写真ですね。

それから、次の「『戦争も核兵器もない世界を』市民の集い」ですけれども、これは先ほど来何度も言っておりますけれども、平和市長会議加盟自治体と私どもが連携しています。私どもというのは、市民6団体のことを指しております。被爆者団体の方、YMCAの方、女

性団体、青年団体等々ですけれども、2011年に広島で初めて開催をいたしました。

第2回目は広島県の方にも参加をいただきました。湯崎県知事からも我々に応援のメッセージをいただきましたし、広島平和文化センターの前の理事長のスティーブン・リーパーさんから心強いメッセージをいただきました。広島県地域生活局の橋本国際部長からも情勢報告をいただきました。

そして次に、今年の市民平和の集いですが、県内の自治体にこの間、参加を呼びかけており、今年は7割以上の自治体の首長さんあるいは職員の皆さんが参加をしてくさいました。そして、それらの自治体の皆さんと私たちと一緒に、被爆の証言を聞いたり、情勢報告を話し合ったり、そういう企画をいたしました。

それから、これは生協関係になりますけれども、私どもは6年前から「ピースナイター」を開催しています。左下、ちょっと小さい写真ですが、広島平和文化センター、中国新聞、広島電鉄、広島東洋カープ、生協ひろしまが主催団体として開催しています。今年はちょうど明後日、8月6日になりますけれども、マツダスタジアムでの阪神ー広島戦ということになります。広島出身の吉川晃司さんの始球式があります。

実は、今年の場合は、セントラルリーグの全ての球団がピースナイターを開催いたします。公式戦ですので、私は非常に画期的な取組だと思っております。広島では、先ほど言いました吉川晃司の始球式ですが、吉川晃司さんは広島出身の有名な歌手、俳優ですけれども、5回が終わった段階で「イマジン」を歌うという中身になっております。

それから、海外とのネットワークですが、実は私ども生活協同組合は、世界のICA (International Cooperative Alliance)、国際協同組合同盟に加盟をしています。生協、JA等々加盟していますけれども、現在、その会員数は約10億人です。だから、平和市長会議と一緒にぐらいの人数になりますかね。2009年11月15日から20日まで、スイスのジュネーブで総会が開催をされました。これまで平和決議は何度かなされたのですが、2009年の場合は核兵器廃絶まで言及をしたということです。私もたまたま被爆地広島で活動していることもありまして、応援スピーチを行いました。主要テーマは、平和市長会議が提唱している2020ビジョンです。2020年までに核兵器を廃絶しようということで演説を行った風景でございます。

それから次ですが、2010年NPT再検討会議に広島県内の生協から6名参加しまして、ここに映っているのは最終日に実施したパレードの様子です。ニューヨークでの撮影です。

最後になりますが、私どものこの取組というのは、ささいな取組かもしれませんが、しかし、一滴の水滴でもやがては大河になっていく、一人ひとりのわずかな力もやがては大きなエネルギーになってくるというふうに思います。

それから、私は特にこの1年感じることで、すごい予感を感じます。エネル

ギーというのは、こうやって増えていくわけですが、土台を形成するときには、本当に小さな動きのような感じがいたしますが、この1年でおそらくぐっと大きなエネルギーに、爆発的に広がるような気がいたします。国内だけではなく、世界、全国に、そんな気がいたします。そのような、この市民社会のエネルギーが国際社会を動かし、やがては戦争も核兵器もない平和な世界が実現できるものであろうというふうに、特に近年、確信を持っております。

このような活動を私どもはこの間やってきておりますけれども、これからも地道ではありますが、多くの市民団体の皆さん、あるいは平和市長会議に加盟の自治体の皆さんとともに、連携を深めて活動を展開していきたいと思っております。

ありがとうございました。

**コーディネーター（水本和実 広島市立大学広島平和研究所副所長）：**

ありがとうございました。

岡村会長理事からは、生活者の視点で、平和が先か生活が先か、やはり平和があつての生活だということを前置きにして、いろいろな報告をいただきました。ありがとうございました。

広島からの報告の最後は、広島女学院高等学校の3名の生徒さんによる報告ですが、ごく簡単に前置きをさせていただきます。

国際連合が最近、軍縮不拡散教育の重要性を世界に訴えております。日本の外務省も、軍縮不拡散教育が重要だというふうにアピールしているんですが、この広島女学院の生徒さんたちは、例えば、国連が主催した国連軍縮会議が今年の2月に静岡県で開かれたときにも何人かの方がそこに傍聴に行き、しかも、各国から集まった専門家の人たちの前で堂々と質問したりして、例えば、被爆地広島が世界に訴えるためには、私たちの被害も訴えるけれども、日本がかつて周辺国に行った加害も視野に入れなければならないというような質問をされて、翌日に日本の元外交官、軍縮大使を務められた人が私のところに近づいてきて、「昨日の質問は非常に良かった。大事なことを女学院の生徒さんは言ってくれたよ」というふうに、元外交官の人にもそういう彼女の気持ちが伝わったようです。

ちょっと前置きが長くなりましたけれども、それでは、広島女学院高等学校の民谷さん、稲住さん、村上さん、プレゼンテーションをよろしく願いいたします。

**民谷 唯（広島女学院高等学校3年生）：**

こんにちは。広島女学院高校3年の民谷唯です。

私は今年の4月に、アメリカ、カリフォルニア州にあるモントレイ国際大学院が開催した「クリティカル・イシューズ・フォーラム」に参加してきました。「核兵器のない未来に

向けて」という議題で、アメリカやロシアの高校生たちと、核軍縮・不拡散についてのプレゼンテーションや意見交換を行いました。私は平和教育の観点からアプローチしました。

これから、その時プレゼンしたものをお見せしたいと思います。本当はもう一人、高2のマッコウリーと一緒に現地で発表したのですが、彼女は今アメリカにいますので、今日は代わりに高2の稲住が来ています。また、パワーポイントの操作は、同じく高2の村上が担当します。

では、よろしくお願いします。

皆さん、こんにちは。私たちはフォーラムに向けた準備をする中で、軍縮・不拡散について勉強しました。深く、広く学びました。そして、幾つかの良い考えが浮かびました。これは概要となります。

まず、私たちは広島女学院について紹介したいと思います。その後で、目的をお話しします。そして、平和教育についての提案をします。その後で、平和教育から得るもの、そして最後に、市民社会と政府の役割について簡単に述べます。

私たちの広島女学院中学高等学校は、メソジスト派の女子校です。126年の歴史があり、初代の校長はアメリカ人の女性宣教師でした。これは1945年当時の私たちの学校の写真です。

1945年8月6日午前8時15分、最初の原子爆弾が広島に落とされました。その爆心地から1マイルも離れていないので、女学院は完全に壊されました。これが被爆直後の女学院の写真になります。

女学院において、私たちにはユニークな平和教育プログラムを実施しています。でも、まずはその平和教育の背後にある悲しい歴史を話さなくてはなりません。原爆が広島に落とされたとき、広島女学院では、その日のうちに352人の生徒と教員が亡くなりました。幾人かの生徒は生き残りましたが、生き残ったことに罪の意識を感じる方もいました。というのも友達や家族、多く死んだからです。

被爆者の多くは、非常にひどい差別に苦しみました。というのは、放射線の影響について無知だったからです。

それから何年も経ちました。被爆者の数は減ってきています。この問題は深刻なことです。広島女学院では平和教育を始めました。そうすれば、被爆の記憶が継承され、そして次世代が平和について学ぶことができるからです。

#### **稲住衣美（広島女学院高等学校2年生）：**

次に、私は本校の平和教育のプログラムについて紹介したいと思います。中1で、私たちは第二次世界大戦中の女学院について、中2では、広島における原爆の被害を学びます。

中3では、もう一つの被爆地である長崎のこと、それから、高1では戦時中の加害者としての日本、また、高2では沖縄の地上戦について学びます。高校3年では現代の平和について学びます。このプログラムを通して、私たちは多角的な視点から戦争の歴史を学び、現代の問題を考え、そして、戦争の本当の恐ろしさということを学びます。こういった平和教育で、私たちは戦争の歴史を学びます。事実を学びます。また、戦争の犠牲者を思いやることができます。戦争の恐ろしさ、現実を学ぶことができます。そして、平和がどれほど大切かを知り、同時に戦争の犠牲者の経験を二度と繰り返してはいけないと思います。このようにして、私たちは戦争のような暴力で問題を解決する愚かさを再認識することができます。

平和教育のもう一つの役割は、被爆者の経験を次の世代に伝えていくということです。被爆者の数は減ってきています。平均年齢は78歳を超えました。私たちが最後の世代、すなわち、彼らの経験を直接聞ける最後の世代であることを忘れてはいけません。広島と長崎が経験した非人道性を学ぶこと、これは再び核兵器が使用されたら何が起こるのかを学ぶことでもあります。このような問題を解決するために、私たちは二つのことを考えました。

まず一つは、戦争被害者に心を傾け、そして戦争の恐ろしさを考えること、もう一つは、もっと活動して核戦争を防止しなくてはならないということです。

#### **民谷 唯（広島女学院高等学校3年生）：**

これら二つのことを通じて、現在私たちが抱えている問題を解決できると信じています。まず、問題は何かを説明します。それは、多くの人たちが、まだ核兵器の本当の恐ろしさを知っていません。例えば、アトミック・ファイヤーボール・キャンディ (Atomic Fireball Candy) というキャンディがあります。アメリカの詩人であり、平和活動家であるアーサー・ビナードさんが講義をしてくれた時、「アトミック (atomic)」という言葉は「驚くべき (amazing)」という意味で使われると教えてくれました。私はすごくショックを受けました。そして、がっかりしました。私たちは原爆の恐ろしさ、そして、被爆者の心を学んでいます。ですから、このような冗談は私は耐えられません。それに、キャンディもおいしくないんです。それから、もし人が被爆者のことを思いやる心があれば、こんな言葉は使わないと思います。

次、その核兵器についての知識が足りません。残念な調査結果あります。2010年の調査によりますと、広島市の4年生から6年生の小学生のうち、原爆投下の正しい日時を言えたのはわずか33%だったのです。このような状況が続けば、被爆の事実というのは忘れられていくでしょう。そして、世界は同じ悲劇を繰り返してしまうでしょう。「歴史は繰り返す」ということわざがあります。こんなことが起こらないようにするためには、平和教育がど

うしても必要だと思います。

まず、平和教育というのは、いろいろな既存の授業に組み込むことができます。社会、科学、国語、アート、コンピューターのクラスです。1年あたり各科目で3時間が理想です。実際、平和というのはすべての科目で学ぶことができます。科学でしたら、原爆の環境や人体に及ぼす影響、社会のクラスでは戦争の歴史、世界をもっと平和にする条約について、また、言葉、国語、それから文学のクラスでは、被爆者の証言を学ぶことができます。

「Summer Cloud (サマー・クラウド)」と「My Hiroshima (マイ・ヒロシマ)」という2冊の本は被爆者の物語です。「Summer Cloud」は広島女学院の英語の先生方による著書です。そして、「My Hiroshima」は、被爆した広島女学院の卒業生による著書です。これらを英語の授業で使用しています。

これは平和教育のもう一つの例です。この作品は折り鶴でつくられています。静岡の中学生が作りしました。国連の会議が今年の2月に開催された時に作ったものです。彼らが平和のイメージを表現したものです。非常にきれいで、多くの人が足をとめて見ていました。平和教育が美術のクラスに組み込んだ良い事例です。

平和教育を既存の授業に入れるのと同時に、私たちは「ピースウィーク」、平和週間を提案したいと思います。9月21日の国際平和デーに近い時期がいいのではないのでしょうか。この平和週間に、生徒はプレゼンテーションをしたり、話し合ったりします。自分たちが学んだこと、あるいは、平和構築に向けてやりたいことについて話し合います。多くの生徒はやる気が出て、もっと課外活動に参加するかもしれません。

女学院では多くの学生が平和活動に参加しています。そのいくつかの例をご紹介しますと思います。

まず、私も含めた生徒は、「ヒロシマアーカイブ」の制作にかかわっています。これはインタラクティブなグーグルマップで、被爆者の証言と写真を表示するものです。地図上の場所か人をクリックすると、1945年8月6日に何が起きたかを見ることができます。東京の大学教授の助けを得て、アーカイブのために被爆者インタビューも行いました。それだけではなく、ヒロシマアーカイブでは、現在と被爆前の広島を比較することができます。また、長崎と沖縄のアーカイブもあります。もしあなたが誰かの証言を伝えたいと思ったら、ご自身で同じようなウェブサイトをつくられてはどうでしょうか。

#### **稲住衣美（広島女学院高等学校2年生）：**

次の活動ですが、これは広島女学院の生徒による平和公園の碑めぐりツアーです。私たち女学院の学生ボランティアが、県外や海外から来た人たちを平和公園にお連れして、モニュメントや記念碑の説明をします。これは4月13日に行った際の写真です。ロードアイ

ランドから来た学生たちをお連れしました。

次は、核兵器廃絶署名の運動です。これは草の根の署名運動です。女学院の学生、先生、そして平和市長会議が企画しています。学生は街頭に立ち、通行者に話しかけ、署名を求めます。集めた署名はニューヨークの国連本部に展示されます。去年は松井広島市長がジュネーブで4月に開催された2015年NPT再検討会議第2回準備委員会に提出されました。

終わりに、女学院国際協力機構 JICS（ジックス）についてお話しします。このクラブは国際交流をするだけではなくて、平和活動もしています。そこで、様々な視点から問題を研究し、解決法も考えます。メンバーの前でプレゼンテーションをし、最終的には行動に移すことをモットーにしています。

一つの例としては、現在、中古のリコーダーやピアノを集めて、カンボジアの子どもたちに送って使ってもらおうとしています。他にも新しいアイデアがあります。例えば、幼稚園や小学校に行き、小さな子どもたちと平和のことを一緒に考えることができると思います。例えば、平和って何色だと思う？と訊いたり、平和の絵を一緒に描くのもいいと思います。笑顔を描く子もいるでしょう。また、自然を描く子もいるでしょう。いずれにしても、小さな子どもたちにとって、平和がどんなものかを考えるいいチャンスになると思います。

**民谷 唯（広島女学院高等学校3年生）：**

まだまだアイデアはあります。ポップカルチャーとか流行を使います。例えば、マイケル・ジャクソンです。マイケル・ジャクソンの「マン・イン・ザ・ミラー」の中で、マイケル・ジャクソンは自分自身で行動を起こし始めるよう訴えています。また、フラッシュモブで平和を表現することができるし、フェイスブックやツイッターを使って、平和に対する考えを共有できます。ポップカルチャーだけではありません。佐村河内守さんは広島の実験の作曲家ですけれども、その「交響曲第1番『HIROSHIMA』」で原爆を表現されました。こういった活動は共感を得ていて、こうすることで草の根レベルでピースメーカーを増やすことができると考えています。

このような様々な平和教育を受けて成長した人は、どうなるのでしょうか。NGOに参加するかもしれません。NGOは政府に働きかけて、そして世界の変化を導くかもしれません。地方や中央の政府で働く人もいるでしょう。科学者になったり、先生になったりして、子どもたちに核兵器の恐ろしさを教えるかもしれません。しかし、全員がプロになる必要もありません。大切なことは、平和教育を通して軍縮に対する意識を高めることです。そして最終的に、この問題に対して無関心でいられなくなるでしょう。実際に、平和教育はピースメーカーの輪をさらに広げていく可能性があるのです。

私たちのプレゼンテーションは終わりに近づきましたけれども、いくつかの政府と市民



社会の役割について少しお話ししたいと思います。

今年の3月、ノルウェー政府主催のオスロ会議が開催されました。核兵器の非人道的な側面について幅広く議論されたという点で、注目すべき会議でした。この会議の開催に当たり、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）というNGOが大きな役割を果たしました。このNGOは、多くの国に会議に参加するよう呼びかけ、そこで発言するよう求めました。結果として、127カ国が参加しました。これによって私たちは市民社会の非常に強い役割を見ることができます。アメリカのウィリアム・ペリー元国防長官は、オスロ会議は核兵器を保有する5か国がとっている段階的アプローチに背くものではないと言いました。むしろ、参加国と市民社会に核兵器の非人道性を認識させるという重要な役割を持っていました。

**稲住衣美（広島女学院高等学校2年生）：**

最後に、いくつかの非核保有国が行っていることについて申し上げたいと思います。日本、ドイツ、そして他の国々が核の傘の下にあり、核軍縮・不拡散に前向きでないことはよく知られています。しかし、実際にはこうした国々はいいこともしているんです。

NPDI、軍縮・不拡散イニシアティブのことについてお話ししたいと思います。NPDIは2010年に核不拡散条約の枠組みの中でつくられ、10の非核保有国で構成されています。オーストラリア、カナダ、ドイツ、日本などが入っています。4月にオランダのハーグで第6回閣僚会議を開き、市民社会の役割を次のように認識しました。「市民社会は軍縮・不拡散に重要な役割を果たす。共通の目標を達成するために、NPDIは市民社会との連携を強化していくつもりである。」と。

同時に、その会議では、日本が「ユース非核特使」のプログラムを始めることを発表し、歓迎されました。このプログラムは、私たち若者が核のない世界を切実に求めていること、また、平和教育が直ぐに全ての学校に導入されなくてはならないことを政府に伝えるチャンスになると思います。

平和教育というのは、子どもや若者の意識を向上させます。平和教育が普及すれば、世界の人々が核兵器のない世界のことをもっと考えるようになり、そして核兵器廃絶の活動を理解し、願わくは支援してくれるようになるでしょう。平和教育というのは無関心な人々をピースメーカーに変えることができます。ピースメーカーは市民社会の一員です。政治、外交において、市民社会の役割は非常に重要になってきています。市民社会の可能性は無限大であり、近い将来、核兵器廃絶を実現することもできるでしょう。

**民谷 唯（広島女学院高等学校3年生）：**

皆様、覚えていていただきたいのは、市民社会というのは私たちピースメーカーで構成

されるべきだということです。それは平和教育を通してなされるものです。平和教育がなければ、人々の意識を高めることもできないし、将来の世代を育成することもできません。平和教育がなかったら、将来もありません。平和というのは、そこにあるものではないのです。私たちがつくらなくてははいけません。皆さんが地元に戻られたら、早速平和教育をはじめてみるのはどうでしょうか？ 1科目に3時間の平和教育が世界を変えるかもしれません。

ご清聴ありがとうございました。

**コーディネーター（水本和実 広島市立大学広島平和研究所副所長）：**

お三方、どうもありがとうございました。大学の教員として私、本当に嬉しく思います。素晴らしいプレゼンテーションをしていただきました。

二つだけ申し上げたいのですが、彼女たちは広島の若い女性を代表してメッセージを発してくださいました。私たちの将来は非常に明るいと確信しています。しかし、もしかしたら、あなたたちは広島から出ていかれるかもしれませんね。それが問題だと思うんです。男の子たちは何をしているかなと思います。あなたたち、ぜひ男の子たちにも、もっと活発になれと奨励してください。

そして、一つ秘訣をお話しいたします。彼女たちは、非常に広島の女性として素晴らしい人たちだと思います。そして、広島女学院の学生としても素晴らしい生徒たちだと思います。そして、岸田文雄外務大臣、広島の出身でいらっしゃいますけれども、その奥様はやはり広島の女学院の出身なのです。この広島女学院のネットワークを通じて奥様に働きかけて、何か核廃絶の仕事をしてくださいと呼びかけることはできないでしょうか。これが秘訣です。

どうもありがとうございます。

それでは、4組のプレゼンテーションを、広島からのスピーカーの発言を終わらせていただきますが、広島だけでなく他の都市からも参加者がございます。

もう一方、プレゼンテーションをしてくださる方がいらっしゃいます。グループですが、「That Day（あの日）」というフィルムの制作者でいらっしゃいますけれども、レベッカ・アービーさんとリチャード・ミロッコさんをお招きしたいと思います。

**リチャード・ミロッコ（「That Day」Film 共同監督・プロデューサー）：**

松井市長、議長、そしてコーディネーターの方、全国の市長の方、そして参加者の方、ボランティアの皆様、そして何よりも被爆者の方々、そしてステージの上の学生の方たち、素晴らしいプレゼンテーションありがとうございました。

私はリチャード・ミロッコと申します。私もレベッカと一緒にフィルムを制作しました。

「That Day（あの日）」というフィルムです。ドキュメンタリー映画ですが、1945年の8月6日、広島原爆にあった三登家の二人の方のその後を追います。この二人の話を通じ、どれだけの破壊が人々になされたかを見せます。同時に、二人が体現する優しく力強いパワーを見せています。

このドキュメンタリーの目的は、過去の出来事と世界の核保有国の現状を知ってもらうこと、そして、例えば、昨今のイランや北朝鮮などの核武装の愚かさを広く宣伝することにあります。また、もしも一つの国が核軍備を行えば、他の国にも連鎖的に核武装化が起こり、際限なく核軍拡競争が展開されることを訴えています。現に、世界は米ソの冷戦時代にこうした事態を経験しております。

私たちは皆様とともに、核兵器のない明日を望んでいます。平和市長会議への加盟都市は増えています。ですが、それと同時に、核兵器の誘導装置や発射装置の開発も進んでおります。ですから、私たちはもっと危険な状態になっています。

このフィルムとそのメッセージは、非常にパワフルかつ効果的により大きなグループの皆さんに、あの日に起きたことや今日どのようなことが起こり得るかを伝え、そして、核兵器廃絶のための行動につながると信じています。

皆さん、レベッカと私、皆さんとぜひ一緒に活動したいと思います。あなたの都市、あなたの組織と一緒に活動したいと思います。そして、皆様と一緒に、またマルチメディアタイプのイベントを行うことによって、より広範囲に変化を起こしていきたいと考えております。私たちの希望といたしましては、さまざまなイベントを通じて、年齢を問わず広く呼びかけたいと思います。そして、若い人たち、将来を担う世代たちに訴えていきたいと思っております。

お分かりのように、このフィルムは息の長いプロジェクトで、ドキュメンタリーにとどまりません。ですから、皆さん、今日でも明日でも、私たちのブースにお越しください。日本語の字幕付きですので、どうぞご覧ください。私たち共にメッセージを発し、核兵器廃絶を求める署名運動を行う可能性について話しましょう。

世界の国が核兵器の開発・備蓄に走る限り、そして、核技術のもたらす悲惨な結果に目を背ける限り、私たちは「That Day（あの日）」のことを常に記憶にとどめなければいけないと思っております。

**コーディネーター（水本和実 広島市立大学広島平和研究所副所長）：**

ミロッコさん、ありがとうございます。

それでは、少し予定時間を過ぎているのですが、コメントや質問があれば、一つか二つお受けしたいと思います。どなかたコメント、質問をしたい方はいらっしやいませんか。ないようですので、私から若干コメントを申し上げてこのセッションを終えたいと思いま

す。

いろいろなご意見を伺いました。また、被爆 70 周年となる 2015 年には NPT 再検討会議が開かれます。また、来年の 2014 年には NPDI（核軍縮・不拡散イニシアティブ）外相会議も開かれます。今後も広島からの、広島市民と行政と巻き込んだ様々な役割が期待されていると思いますけれども、本日のいろいろな発表を通じて、広島の今後の期待にこたえるべく、様々な方が活動していることをご理解いただけたと思います。

以上をもちまして、市民団体・被爆者団体との対話集会を終了いたします。皆様のご協力に感謝いたします。

ありがとうございました。

**司会：**

皆様、どうもありがとうございます。

本日のプログラムはこれもちまして、すべて終了させていただきます。

あすは午前 9 時 45 分から、第 3 回平和市長会議国内加盟都市会議を開催いたします。日本の都市の皆様は、国内加盟都市会議の開会に合わせてお集まりくださいませ。

なお、日本国外からの参加者の皆様は、午前 11 時からの各国政府・NGO 関係者などとの対話集会の開会に合わせてお集まりください。

なお、お帰りの際は、同時通訳レシーバーを受付にご返却くださいますようお願いいたします。本日はありがとうございました。